



呉巡検調査を振り返って その六 : 「呉巡検報告」 として、敢えて被爆地広島に関して考察した意味

藤田, 裕嗣

(Citation)

海港都市研究, 18:90-91

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482811>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482811>



呉巡検調査を振り返って その六

「呉巡検報告」として、敢えて被爆地広島に関して考察した意味

藤田裕嗣

報告者は、年度末には定年退職を迎える。呉巡検の最後の夜、1月8日に「広島城下町の中心街路、西国街道が1945年8月原子爆弾の被害でも今も辿れる歴史地理学的意味」と題して報告した。このタイトルにした意図は、歴史地理学では地割を重視し、それが地図で辿れ、現在の景観にも色濃く反映されていることが関わる。終戦直後は「草木も生えぬ」と言われていたが、通称「原爆ドーム」でも明らかなように、今から約80年も前に原子爆弾が投下された証拠は、敢えて残す意図がない限り、今では可視化されていないのである。

父親は1929年2月、同じ中国地方に位置する鳥取県南東部に生まれ、尋常小学校を卒業後、広島市内の官立学校に進んでモールス信号を習ったとは、幼少の頃に、生前の母から教えられていたのだが、両親とも他界した現在では、その学校の所在地とか、習った内容の詳細までは、不明なままに残された。卒業後に満州国の奉天に派遣されており、あくまで伝聞など様々な証拠から察すると、奉天气象台で観測したデータを当時は満州国の首都だった長春に電信を使って打電するのが、任務だったと考えている1)

そこで、8日の広島巡検の最後で、リニューアルオープンした広島平和祈念資料館を皆で見学した後、すぐ隣の広島原爆死没者追悼平和祈念館で調査する機会が与えられたので、その父親が広島時代にいた官立学校と寮の位置だけは知りたい、と思い、そこにおられた方に聞いてみたら、とてもご親切で、今までで最も確かな情報を教えてもらった。

我々の広島巡検の最初は、呉港から宇品港に到着した訳だが、祈念館の方のお蔭で、要は、亡き父の官立学校は宇品地区内にあった、と判明した2)。当日に我々一行は港に到着して見学後、市電に乗り、広島市郷土資料館の展示を見学した訳だが、その近くで、駅から言うと南西に位置する比治山周辺、との淡い記憶があっても、生前の父を伴い一緒に探した経験のある姉から、つい最近も否定されたので、そもそも当方自身の勘違いだったようだ、と一応、考えたのだが、それ自体が間違いだろう。郷土資料館の住所自体、「宇品」なのだから。3)宇品自体が、実は広域地名なのは明らかである。

一方で、広島市内で戦前について調べるには、その頃に生きていた方の記憶だけに頼る

ことは、もうできない、敢えて問い、残し、辿る必要がある、この点を最後に強調しておきたい。

〔付記〕 国立広島原爆死没者追悼平和祈念館で閉館間際の僅かな時間でも、誠心誠意、寄り添って調べ、情報提供して下さった関係者に、末筆ながら深甚の謝意を表したい。

〔注〕

1) 広島から奉天までの若い頃の経験について、生前の父自身に当方が敢えて聞いたら、にたっと笑って、「忘れた！」と言われ、全く語ってくれなかった。すなわち、拒否された。余りに辛かった経験ゆえに、本人は忘れようと努めていたに違いない。これは一例に過ぎず、きっとよくあるパターンであろう。

2) 父が学んだのは、「広島電信講習所」に間違いないが、その「庁舎使用状況」の図が載っている本を探し出していただけ、地図に併記された住所は「所在地 市内宇品町 725 番地」である。閉館間際で慌て、関係者のご迷惑も避けたかったため、その書名について、以下の2冊のうち、どちらか、なのか、今は不明であり、いずれも挙げると、以下の通り。

(a) 書名は不明、中国電気通信局発行（1955 年）

(b) 日本電信電話公社中国電気通信局編『電信電話事業史＜中国＞』、財団法人電気通信共済会中国支部発行（1969 年）

寮についてもお聞きしたら、今の郵政省関係の庁舎が並ぶ、白鳥にあった筈だ、との由だった。

3) 広島市南区宇品御幸 2-6-20。郷土資料館の建物自体も、元は軍関係の施設なのである。

4) 父の出た官立学校の同窓会誌が、父が死亡する十数年前だったか、実家に送られてきたのを当方は記憶しており、姉に保管場所を尋ねて、何かヒントはないか、探してみたい。